

ゲーベル凸版切手の10面素版組み込みずれ

永吉 秀夫

法隆寺五重塔図案の新昭和1円20銭切手は、戦後の混乱の中で書状用として発行された普通切手ですが、その10枚ブロックの画像を右に載せました。同じ画像を2枚重ねてありますが、その左側(重なった表側)をよくご覧ください。

何か変なことに気づきませんか？などといきなり言われても、難しいかもしれません。そういう場合は、半分隠れた方の画像を、赤色の補助線と一緒にご覧ください。2段目と3段目の間に横ずれがあること、おわかりいただけるでしょうか。この補助線は3段目以下の切手印面の右端に合わせて引いてあるのですが、1段目と2段目では印面と補助線が1ミリほど離れています。

この切手は古く田沢切手の時代から使われている「ゲーベル凸版印刷機」で印刷されています。この印刷機では、円筒形の版面に100面シート2面が製版されていますが、これは横5枚縦2枚の10枚ブロック(10面素版)を組み合わせて構成されています。シート右上位置の素版の取り付け位置がずれたために、画像のような印面のずれが生じたわけです。耳紙の「枠線」も、切手印面と一緒にずれていますね。

戦後の混乱期に発行された新昭和切手では、他の切手でも印面ずれがしばしば見られます。平版や凹版の切手にも見られます。しかし肉眼でもわかるほどのずれは、滅多に見られるものでありません。その中で紹介品のような印面ずれは、著しいずれが珍しいというだけでなく、ゲーベル印刷機の版面が10面素版の組み合わせによって構成されていることを物語る、興味深いマテリアルであると言えます。

